

| | |
|----------|------|
| ディビジョン番号 | 19 |
| ディビジョン名 | 化学教育 |

| | |
|-----|---------------|
| 大項目 | 6 化学史・科学技術史 |
| 中項目 | 6. 1 化学アーカイブズ |
| 小項目 | |

| | |
|--------|--|
| 概要 | <p>日本の化学・化学技術の発達過程を示す貴重な史料の多くが既に散逸し失われているが、現在残されている重要な史料の所在を調査し、可能な限り収集保管することをめざして化学アーカイブズ小委員会が設立され活動を開始し、文献資料を中心に情報や一部の実物資料が集まりつつある。今後は、この活動を他学協会との協力関係を含めて、さらに組織的に行い、化学史料館設立を実現することが望まれる。</p> |
| 背景 | <p>2003年に行われた日本化学会創立125周年記念事業の準備過程で、先人たちの足跡を示す貴重な史料の多くが散逸し、失われていることが明らかになった。こうした事態を憂えた当時の化学会会長の発案により、我が国の化学に関する史料の所在を調査し、可能であれば収集保管し、さらに化学アーカイブズ（化学史料館）を設立することをめざして2004年6月に化学教育協議会に化学アーカイブズ設立準備WGが設立され、2005年3月には小委員会に格上げされ、本格的に活動を開始した。</p> |
| 課題と問題点 | <p>ノーベル賞百周年の2001年をはさんで、3年連続で白川英樹博士（2000年度）、野依良治博士（2001年度）、田中耕一氏（2002年度）がノーベル化学賞を受賞したことに代表されるように、我が国の化学・化学技術のレベルは世界最高レベルに達している。この発展は、江戸時代末期から明治維新を経て、明治・大正期、昭和初期の先人たちの多大な努力により欧米の化学・化学技術を咀嚼吸収し、さらに独自の研究・技術開発へと推進してきた礎の上に成り立っている。しかし、最先端の研究や技術開発をおこなう大学などの研究機関や企業では、こうした足跡を示す史料を保持・保管していくことは難しく、新たな組織の発足や改築・移転などの際に廃棄されることが多く、今後も廃棄される可能性が高い。2004年に開始された本活動は、残された史料を保存していく最後のチャンスと位置づけられ、史料所在調査と保管処置を早急にとる必要がある。本活動発足の経緯と意義は「化学と工業」誌2004年10月号に掲載され、会員に史料に関する情報提供を求めた。また、小委員会発足に伴い、全国の主な大学、研究機関、企業関係者などに史料所在情報に関するアンケート調査をおこなった。その後の「化学と工業」誌における何度かの呼びかけもあって、数多くの情報が寄せられたが、文献資料に関する情報が多く、実験機器類、薬品類、実験ノートなど実物資料に関する情報提供が少ないのが現状で</p> |

ある。この調査を通じて、約 350 点の書籍・写真資料、化学薬品試料などが化学会に寄贈され、化学会と国立科学博物館に保管されている。

本活動については、朝日新聞の東京版（2006 年 12 月）と大阪版（2007 年 2 月）に掲載され、多方面に関心を呼んだ。2007 年 3 月の化学会春季年会で収集された史料の一部が展示され、「日本の化学のルーツを探る－化学史料館作りをめざして」と題して市民公開講座が開催された。2007 年度からは偉大な化学の先達の姿と肉声を映像と音声で残す「化学の語り部」構想を実施することになっている。

対処方法と解決方法

これまでの調査は、会員や関係各機関からの情報提供を求めるものが中心であったが、今後は、積極的に調査に出かけていく必要があるであろう。「化学の語り部」構想は、その一つの方法である。データベースを可能な限り公開し、集められた資料の一般公開を行うことによって、関係各方面の関心を高めることも必要である。こうした実質的活動を行うためには、外部資金を積極的に導入していく必要がある。また、他の学協会の中にもこうした歴史資料調査を行っているところがあり、協力関係を築き上げる必要がある。また、博物館などとの連携もより密接にすることが望まれ、化学史料館の設立は、既存の施設にその機能をもたせることが現実的であるように思われる。

今後推進すべき課題

- ・ 国内に現存している化学及び化学技術に関する歴史的資料の所在調査を系統的に実施し、データベースを作成し公開するとともに、史料収集・保存を推進すること。
- ・ 最近の資料についても、化学の足跡を示す史料として調査・収集・保管を推進すること。
- ・ 他学協会と協力して、関連分野の史料についても調査・収集を総合的に実施すること。
- ・ 収集した資料・情報を基に化学史料館を設立すること。または、既存の施設にそうした機能をもたせること。

キーワード

化学史、歴史資料、資料調査、資料収集、データベース

（執筆者： 若林 文高 ）